

# 日本昔話「たにし長者」にみる信仰

千野 美和子

## I、初めに

ここで取り上げる日本昔話「たにし長者」は、たにしの姿で生まれた申し子が、よく働き、嫁をもらい、人間の姿となって栄える話である(稲田ら、1994)。「たにし息子」ともいう。昔話の分類では、主人公の異常な誕生について語る異常誕生譚の1つとして分類される(稲田ら、1994)。

また、異類婚という視点からもこの昔話を捉えることができる。たにしという人間とは異なる異類が、人間の娘と結婚し、のちに人間の姿となり幸せになる話とみることができる。そのように考えた場合、河合(1982)の述べるように、日本の異類婚においてほとんどが不幸な結末になるのに対して唯一幸福な結婚に至る話ということができる。

さて、筆者は以前、日本の異類婚の多くがいわゆるハッピー・エンドの結末にならないのに対し、この物語が幸福な結末を持つことを取り上げ、その理由について考察した(千野、2007)。類似のグリムメルヘンと比較しながら、この物語の特徴について説明し、物語の底に流れている思想としての日本人の精神性について論じた。本論文では、再度「たにし長者」を取り上げ、先の論文では探りきれなかった点について論を深めたい。日本の話でありながら西欧の異類婚と同じ結末をもつこの物語のタイプとしての特徴を考察し、次にグリムメルヘンや日本の類話と比較しながら、物語に表現された精神性、特に民衆の信仰、日本人が本来持っていた信仰の在り方について考えたい。

## II、昔話のあらすじ

昔、あるところに、分限者の長者があった。その長者の小作人に子どものない貧しい百姓夫婦がいた。もう40を越していたが、子どものないのを歎いて、「わが子と名のつくなら、かえるでもよい、たにしでもよいが」と言って、水神様にお詣りして願をかけていた。ある日いつものように、心から水神様に祈っていると、

どうしたことか、急におなかが痛んできた。診てもらうと子どもが生まれるということだった。夫婦はそれをきいてたいそう喜び、神棚にすぐ灯明をあげ、子どもが無事に生まれるように水神様に祈った。それからしばらくすると、1匹の小さなたにしが生まれた。びっくりしたが、水神様の申し子だからと、神棚に上げて大切に育てた。

どうしたことか、生まれてから20年たったけれども、たにしの息子は少しも大きくならず、一言も口をきいたことがなかった。それでも、ご飯は一人前食べた。ある日、年とった父親は、長者に収める年貢米を馬につけながら、たにしの息子のことを「たにしの息子では何の役にも立たない。私はこうして一生働いて、女房や子どもを養わねばなるまい」と歎いた。すると、たにしの息子が初めて口をきき、父親の代わりに年貢米を長者のところに持っていこうと言い出した。父親はたいそう驚いたが、水神様の申し子の言うことなので、背いたら罰があたるかもしれないとたにしの言うとおりにした。息子がうまく馬を操っていく様子を見て、父親は、急いで家に引き返し、神棚の前に行って、ありがたい子どもを授けてくれたことに礼を言い、子どもが無事に長者の家に着くようにと、夫婦で一心に祈った。

長者の所に着いたたにしは、無事に年貢を納めた。それを見た長者は、たにしを家の宝にしようと考え、たにしに2人いる娘のうちの1人を嫁にやると言った。家に帰るとたにしはそのことを親に伝えた。父親と母親は驚いたが、水神様の申し子の言うことだからと、伯母に頼んで長者の家に確かめに行った。長者は、二人の娘をよんで、たにしのところへ嫁に行ってくれるものはないかと尋ねた。姉娘は怒って断わったが、やさしい妹娘は、せっかく約束したことだから、わたしはたにしのところへ嫁に行くと言った。

嫁は、父親と母親によく仕え、よく働くので、暮らし向きもよくなった。父親も母親もこれも水神様のおかげだと一生けんめいに水神様を信仰した。そのうち、嫁は祭りの見物に行くことになった。嫁はたにしの夫

を帯の結び目に入れて、2人で出かけた。2人が薬師様の鳥居の前まで来ると、たにしは、自分はわけあって中に入れないから、1人で詣ってくるように嫁に言い、田の畔に置いてもらう。ところが、嫁が戻ってくると、夫の姿が見当たらない。娘はあちらこちら探し、田の中にも入って泥だらけで探したが、どうしても見つからない。いっそのこと田の中の深い泥沼の中に入って死んでしまおうかと、深みに飛び込もうとした。すると後ろから声をかける者がいた。振り返ってみると、立派な男が立っていた。娘はこれまでの話をした。すると男は、自分がそのたにしであること、自分は水神様の申し子で、これまでたにしの姿でいたが、娘が薬師様に参詣してくれたので、人間の姿になることができたこと、そして、水神様にお礼詣りをしてここに帰ってきたところだと話して聞かせた。2人は喜んで一緒に家に帰り、それを見た父親も母親も、知らせをきいた長者もたいそう喜んだ。そして、若い夫婦は商いをして、町一番の長者になり、親類縁者みな繁昌したという。(関敬吾編『こぶとり爺さん・かちかち山日本の昔ばなし(Ⅰ)』より要約)

### Ⅲ、この昔話のタイプについて

この昔話は、『日本昔話大成』では、「本格昔話」の「誕生」の中に分類される134「たにし息子」の類話の1つと考えることができる。関(1978)は「誕生」の項について、「主として異常誕生児を主人公とする話をあげた。…わが伝承は猛獣を親とするものは少なく、水と関係する爬虫類、植物からの誕生が目立つ。ほとんどが背後に民俗神への祈願が介在する。…一般にかかる誕生児を主人公とする物語が本来の意味の昔話(メルヘン)である」と述べ、このタイプの話が「本来の意味の昔話」であることを指摘し、その最初の話として「たにし息子」を載せている。

関(1978)は「たにし息子」について、「我が国の異類婚姻譚をヨーロッパの同種の昔話と比較すると、我が国の伝承はほとんど人間の形態をとって婚姻関係を結ぶが、ほとんど人間によって両者の間で守らなければならない規範が破られ(女性が異類の場合はそうであるが、男性が異類の場合異なった展開になる:筆者)、破局に終わる。異類の姿に還って去って行く。ヨーロッパの伝承はほぼこれと逆の形式をとっている。た

にしは最初動物として人間の女性と結婚するが、結婚することによって人間の姿に還る。ヨーロッパの伝承と共通する例である」と、異類婚姻譚の視点から解説している。

また、同系統に属するものとして、グリムの108「はりねずみのハンス坊」をあげ、「前半はむしろ『水乞型』『猿掣入型』と同一モチーフで、後半はたにし息子の後半と同一である」と解説する(関、1978)。この点についてはIV章で検討する。

また、稲田(1988)はこの134を「むかし語り」の「Ⅵ 誕生<異常誕生>」の139「たにし息子」のタイプとして分類している。このタイプは次のモチーフからなる。

- 1、子のない爺と婆とが神様に祈願すると、たにしが、子になろう、と呼びかけるので、子にして育てる。
- 2、成長したたにしが馬の耳に入って物売りにいくと、珍しがられてよく売れ、爺婆は金持ちになる。
- 3、たにしの強い願いで爺が長者に、娘を息子の嫁にくれ、と頼みに行くと、上の二人はことわるが末娘が承知して嫁になる。
- 4、夫に頼まれ妻が夫を投げて割ると、たにしはりっぱな男に変身する。

稲田(1988)は、ATの分類ではこのタイプの同一タイプはないが、対応タイプとしてATのⅡ「通常の昔話」のA「魔法の物語」の「超自然的または魔法にかけられた夫(妻)または他の親類の物語」の433C「蛇婿と嫉妬深い娘」をあげている。また、神様に祈願して婆がたにしの子を生むという伝承もあり、申し子は異常誕生の子とうけとることができること、「たにし」は「さざえ」「まいまい」「なめくじ」「にし貝」「蛙」などに変化するが、すべて水に縁のある小動物であると説明する(稲田、1988)。

本論で取り上げる昔話「たにし長者」は、関の分類、稲田の分類ともに、「誕生」に分類される。タイプ名は、両者とも「たにし息子」で、「たにしの子どもを授かった」話の始まりを強調するのに対し、ここで取り上げる話の題名は「たにし長者」で、「裕福になり長者になった」話の結末が強調される。関はモチーフをあげていないが、稲田のあげているモチーフとこの物語を比較すると、すべてのモチーフのエピソードが異なることがわかる。その意味で、稲田のあげる「たにし息子」の典型の物語ではないことがうかがわれる。

その違いについて述べておく。モチーフ1は、たにしが子どもとなった発端についてである。「たにしが、子になろう、と呼びかけるので、子にして育てる」に対して、「婆がたにしを出産する」となる。モチーフ2は、成長した息子の活躍ぶりについてである。「成長したたにしが馬の耳に入って物売りにいくと、珍しがられてよく売れ、爺婆は金持ちになる」に対して、「父の代わりに馬をうまく操り年貢米を無事に納める」となり、そのことが長者の目に留まり、次のモチーフにつながる。モチーフ3はたにしの結婚の経緯についてである。「たにしの強い願いで爺が長者に、娘を息子の嫁にくれ、と頼みに行く」に対して、「長者の方がたにしを家の宝にしたいと思い娘を嫁にやるという」ことになり、後半のエピソード「上の二人（ここでは姉は一人）はことわが末娘が承知して嫁になる」は同じである。モチーフ4は夫が人間の姿になる経緯についてである。「夫に頼まれ妻が夫を投げて割ると、たにしはりっぱな男に変身する」に対して、「妻が薬師に祈ったおかげで人間の姿になった」となる。

ここで取り上げる「たにし長者」は、たにしとして生まれた子どもが成長して活躍し、娘と結婚、その後人間の姿になるというタイプと同じモチーフ構造を持つが、それぞれのモチーフの内容はタイプに挙げられたものとは異なり、この話ならではの独自の展開と特徴が見られる。これについては、V章以降で検討したい。

ここでは、このタイプに分類される話の特徴について触れておきたい。この話は、異常誕生という昔話のタイプに分類されつつもその後の展開は、いわゆる異類婚の話の展開をたどる。つまり、異常誕生と異類婚（婚）の両タイプに分類可能であるが、関、稲田のどちらも、異類婚でなく、異常誕生に分類している。この特徴が、本論で問題としている「この昔話はなぜ日本の異類婚ながらヨーロッパ型の結末を持つのか」ということと関係がある。通常異類婚の場合、その出自は問題にされず、異類婚や異類女房は、どこからかやって来て娘や男に求婚し、結末では去っていく（いなくなる）。しかし、この話のように婚姻が続き幸福な結末が生じるという通常異類婚とは異なる展開・結末が生じるためにはそれなりの理由を必要としたと考えることができる。その理由となるのが、異常誕生である。つまり、主人公は誕生時から特別の存在であ

り、それゆえにこそ普通では起きない出来事が起きたと理解することができる。異常誕生ゆえに異類婚において西欧型の結末をもつことを重視すれば、関と稲田両者の分類も頷ける。

ちなみに、ATでは同一タイプはなく、対応タイプがあるだけである（稲田、1988）。それによると、タイプとしての「異常誕生」や「異類婚」という分類はなく、「超自然的または魔法にかけられた夫（妻）または他の親類」に分類され、大きく「魔法物語」の1つとされる。

#### IV、グリムメルヘンとの比較

この章では、関（1978）が同系統の話として挙げているグリムの「ハンスはりねずみぼうや（高橋訳、1976）」を取り上げ、西欧の異類婚の特徴、「たにし長者」との共通点と相違点について検討する。これについては、以前論じた（千野、2007）が、補足しながら、再度述べておきたい。

まず、あらすじを提示する。

むかし、金持ちの百姓がいた。他の百姓に子どもがいないことをからかわれた百姓は腹を立てて、はりねずみでもいいから子どもがほしいと呪った。生まれた子どもは、上ははりねずみで下は男の子だった。ストーブの後ろにわらを敷いて男の子を寝かした。こうして8年間ストーブの後ろに寝ていた。父親はうんざりして子どもが死んでくれればいいと思っていた。それから、男の子は父に風笛を買って来てもらおうと、豚とロバを連れて、おんどりに乗って家を出ていった。やっかいばらいができると思い父親は喜んだ。ハンスは森で風笛を吹き、豚とロバの番をして、何年も暮した。ある時、森に迷った王が、ハンスに道を尋ねた。ハンスは城に帰って最初に出会うものを自分に与えるなら道を教えると言った。王は約束をしたが実行しなかった。次に森に迷った別の王も同じ約束をした。最初に出会ったのはお姫さまだった。王は悲しんだがその約束を話し、姫は父のためにその人と喜んで一緒に行くと約束した。ハンスは森で暮らすのがいやになり、父親の元に帰った。父親は、ハンスは死んだものと思っていたのに生きていたのがっかりした。ハンスは再び家から出ていき、最初の王国に行き、うそをついた報いをその王と姫に与えた。二つ目の王国では彼を歓

迎した。姫はハンスの姿に驚いたが、約束を守って彼と結婚した。晩になって床に入るとき、ハンスは、家来に彼の脱いだ皮を火で焼き尽くすように王に頼んだ。そのとおりにこなされると彼は救われ、人間の姿になり、美しい若者になった。そして、本当に結婚が祝われ、王は彼に国をゆづった。その後若者は父親の元に行き、自分がハンスであると名乗ると、父親は喜んで一緒に息子の国に行った。(高橋健二訳『グリム童話全集Ⅱ』より要約)

このグリムの話と「たにし長者」の共通モチーフを取りだすと、「子どものいない夫婦が、たにしあるいははりねずみでもよいから子どもがほしいと言うとその通りの子どもが生まれる。この子どもは成長して長者の娘、あるいは王の娘と結婚する。結婚後子どもは人間の姿になる」である。稲田のあげたモチーフの1、2、4を備えており、3も結婚に至るまでのエピソードととらえるなら、異類としての異常誕生後、異類智として同じ物語構造をもつと考えられる(確かに、父親を助ける代わりに娘をもらおうという結婚の経緯については、関(1978)が述べる昔話との類似性が高い)。

異類智の話の場合、主人公は女性であり、別の存在である異類と結婚を通していかに関係をとるかが、物語の中心となる。関係をつなぐことによって異類が人間になる西欧的展開と異類として関係を切る日本的展開がある。ところがここではどちらも異類智となる息子が主人公となっている。まず主人公が普通でない誕生をしたことから語られる。それゆえ異常な誕生で生まれた主人公が成長してどのようになっていくのが物語の中心となる。偉業を成し遂げた英雄物語は特別な存在であることを示すためにこのような異常誕生が語られることが多い。それゆえ、この物語が英雄の物語へと展開する可能性をもつ。異類智という視点から見れば、この物語で異類が人間になることを可能にした展開として、関係を切るのではなく関係をつなぐ結婚となったことを挙げるができる。すなわち、娘が父のいうことをきいて結婚を受け入れる。それゆえ、「美女と野獣」型、たにしあるいははりねずみは人間となり二人の関係は結婚後も未長く続くという結末となる。

娘が結婚を受け入れ関係をつなぐことによって、異類は人間となり幸福な結末を迎える物語展開は同じでありながら、物語に流れるテーマと雰囲気はかなり異

なる。グリムの物語について検討する。

物語は主人公が誕生するきっかけとなった出来事から始まる。子どもがいないのをからかわれて父親が腹を立てて言った言葉から、主人公は生まれる。この主人公は、父親の呪いの言葉から生まれた子どもであり、望まれない子どもである。父親は負い目があるので、子どもの言う通りにするが、厄介払いできることを望んでおり、できれば死んでくれることを期待している。呪いの言葉から始まるこの物語は、物語が進む中でも、呪いという負のエネルギーが底に流れている。そのため、この物語では、呪いを受けた主人公の救済がテーマとなる。この物語の異常誕生は、父の不用意な言葉から生じたものであり、主人公がどのように救われるのかの物語であり、英雄誕生物語とは区別される。このような親の言葉から呪いを受けた主人公の物語としてオーストリアメルヘンの「子牛の王様」がある。この場合は妃が不用意に言った言葉から子牛の子どもが生まれる。この物語も子牛である主人公の救済がテーマとなる。両者とも、親のかけた呪いというところから、家族の問題が浮かび上がる。

カースト(Kast, 1986)は家族という視点からこれらの物語を分析している。子どもがほしいという強い願いのもと、願いがかなって子どもが生まれたが、子牛であった事に対して、不幸だと受取り、子どもを家畜小屋に追いやってしまう。グリムの話でも、子どもはストーブの後ろに寝かされたままである。ともに、このような子どもを持たねばならないことをしかたがないとあきらめて子どもを養ってはいるが、親として子どもをあるがままに受け入れ育てるということはできていない。主人公は親から拒否された子どもとして成長する。

子どもは8歳を過ぎて、自ら家を出て1人森で暮らす。8歳の自立をどのように考えればよいだろうか。同じく8歳で親元から離れ森で暮らすことになるグリムの「鉄のハンス」という物語がある。この物語では、王子は8歳の時に鉄のハンスによって両親の元から連れ去られる。この8歳という年齢に、ブライ(Bly, 1990)は注目し、「8歳前後に何かを失う」としている。確かに、少年期と呼んでもよい児童期中期のこの時期に、親元を離れることの意味は大きい。「鉄のハンス」の王子は、森の中で鉄のハンスの命じることを1人で行う。親から離れ、1人森の中で暮らすことは、子ど

もから大人になるためのイニシエーションと考えられ、森の中で彼は大人になるという課題に取り組む。ブライの言う失うものとは、子どもとしての自分と子どもとして関わってきた両親との関係であると理解できる。森の中で暮らすということは、自分と向き合い内面を成長させることである。カースト(Kast, 1986)は、この主人公は音楽を奏で豚の番をするという感情領域での仕事をしたと述べる。

森に迷ってきた王に約束させる内容は、「美女と野獣」型のグリム「歌ってはねる、ヒバリ」と同じである。しかし、まず、約束を守らない1番目の王とその姫に報復を加える。底に流れる呪いという負のエネルギーを解き放つために必要な行為である。そして、結婚の夜、主人公は家来に火を用いて皮を焼き尽くすことを王に頼む。カースト(Kast, 1986)は動物の皮は焼き捨てられなければならないが、焼き捨てるのは動物である夫自身が提案しなければならないと述べる。「子牛の王様」の場合、妻が姉たちの忠告に惑わされて皮を焼いてしまう。夫は悲鳴を上げて、妻の元を去り、ここから妻が夫を捜す物語が続いていく。ここでは、夫自らの提案で皮の焼き捨てが行われる。この物語では、呪いが解かれる時が来ているのだ。火によって呪いという負のエネルギーが浄化され、呪いは解けて、夫は人間の姿となり、物語は終わる。

ヨーロッパの昔話が魔法メルヘンと呼ばれ、ATでも魔法物語に分類されるように、かけられた魔法や呪いがどのように解かれていくが物語の中心テーマになる。魔法や呪いなど負のエネルギーが問題となるため、この物語のように、幸福な結末に至るまでに、心の暗い側面と関わる必要がある(千野、2010)。

## V、誕生

この章からは、グリムとの比較を中心に、日本の類話も参照しながら、この日本昔話「たにし長者」の特徴について考えていきたい。グリムとの比較によって、この物語の特徴が明らかになるだけでなく、他の類話を参照することによって、さらにこの話が「日本のたにし息子」の中でも独自の特徴を持っていることがわかってくる。その特徴から、この物語が語ろうとしている思想について検討したい。

物語の始まりの状況は、グリムと同じである。夫婦

に子どもがいないところから始まる。グリムでは、父親の呪いの言葉から始まるのに対して、この話では水神様への祈りから始まる。

グリムでは、父親が他の百姓にからかわれて腹を立てて呪った言葉から子どもが生まれる。カースト(Kast, 1986)が「子牛の王様」で王妃が発した言葉について述べているように、本来的な子どもがほしいという思いから出た言葉でない。そこにあるのは、自分自身の子どもの得たいという利己的な願望だけである。このような強い子ども願望には、どうしても子を持ちたいという凝り固まった気持ちが隠されていると彼女は分析する。そこにあるのは、子どもを持っていないのは世間に対して恥であり、自分の無能や欠点であると考えからであるという。親にとって大事なものは子どもでなく自分の価値なのである。

子どもがいないゆえに子どもがほしいという夫婦の思いはここでも同じである。しかし、この夫婦は異なった行動をとる。子どもがほしいと水神様にお参りして願を掛けるのである。子どもは授かり物という言い方があるように、人間が努力してもどうにもならない面がある。それほど、子どもの誕生というのは創造的なものであり、いわば人の力を超えた神の領域で生じる出来事である。それゆえ、神に祈り、神の意志に任せるのである。この夫婦は、そのところを充分承知していて、このような行動をとったと考えることができる。神に頼むということは、ある意味、利己的な自分を捨て、他者とながった大きな何かに自分をまかせることでもある。それぞれの親の思いの奥にある動機が物語を違った展開へと運んでいく。

日本の類話(関、1978)を見てみると、この話のように、神に祈願して、子どもを授かった話が多い。神は、水神様の他に、山の神、村の神、天神様、そして観音様、薬師様などであり、日々の暮らしに根ざした信仰の対象である。神に祈願することによって、「たにしでもよいから」という言葉通りの子どもが生まれる。他に、かえる、さざえ、かたつむりなど水と関わる生物を子どもとして願い祈るが、呪いや不用意な言葉から出たものはない。また、いわゆる普通の出産でなく、親指やすねから生まれる話もある。薬師様に祈願して「すねに孕んだから大事にせよ」という同じ夢を夫婦が見る、観音様に祈願して「毎晩すねにつばを付けると子どもが生まれ、後に福德長者になる」とい

うお告げがあるなど、神の申し子としての異常出産であることがはっきりとわかる場合もある。

出産という形でなく、たにしが夫婦の子どもになるエピソードが入る場合もある。「爺と婆が子どもがほしくて村の神に詣る。満願の日に神社の清水でたにしを拾い、つぶ太郎と名付けて大事に育てる」「爺が子どもがないので探しに出る。堰にたにしがいるので拾って帰る」のように、たにしを拾って子どもにする話も多い。また「田の草刈りに行っているとたにしが転がってきて、爺のひざに這い上がり息子にしてくれというので連れて帰る」など、たにしがやって来て自分を息子にしてくれと頼む話もある。神からの申し子という明白な叙述はないが、偶然性、いわゆる出会いの縁を大切にすることがうかがわれ、大きな意味での神の力がそこに働いているように思われる。むしろ、神という存在を登場させずに、子どものない夫婦が、たにしと出会い、そのたにしを拾って子どもにし、大切に育てるという表現の中に、信仰の元となる在り方がうかがわれる。

生まれた子どもはたにしであった。たにしは、水田や池沼に棲む小型の巻き貝で、その棲息地が農民生活に深い場所であることから、水の神の指令と見なされていたという（稲田ら、1994）。昔の人々にとって、たにしは、生産活動の場である田に棲んでおり、日常的に馴染み深いものである一方、神の使いと見なされるように、粗末に扱ってはならないものとして捉えられていたと思われる。

誕生した子どもの受け止め方もグリムとは全く異なっている。グリムの場合、父親はうんざりして死んでくれればよいと願うが、たにしの親は、水神様の申し子だからと神棚にあげて大切に育てる。たにしという異形の子どもを、びっくりしつつも受け入れたのである。起こった出来事をありのままに受け止める姿勢である。この違いは大きい。このように受容できるのは、日々の生活に対する受け止め方からくるものかもしれない。神が授けてくれたものという意識が強いからであろう。

ここでは、誕生について、検討してきた。グリムの場合、自分の利己的な願望のためであり、自分の思い通りの子どもができなかった場合、切り捨てる。子どもの誕生までも、自分の思い通りにしようとする姿勢がうかがわれ、そうでない時はなかったことにしてし

まう。それに対して、日本のそれは類話も含めて、神や自然に任せる姿勢が強く、起きた出来事を授かり物として受け止め大切にする姿勢がある。

## VI、成長

グリムの主人公は8歳という幼さで親元から離れて、大人になるまでの長い期間を1人森で過ごす。それに対して、主人公のたにしは、20年立っても大きくならず親元にいる。そして、ずっと神棚の上で、親に養われる。早すぎる自立に対して遅すぎる自立である。

たにしがなかなか成長しないことについて、「今日手が出るか、足が出るかとたにしのことばかり気にしていたが、いつまでたってもたにしのままで童になるようすもなかった」といつ人間の子どもになるのかと期待を込めて育てている様子が描写されている類話もある。そのような落胆を持ちつつも、大きくならないたにしの子どもに、生れた時と変わらぬ態度で接する。

類話と同様に、父親は20年立っても変わらないたにしを「役に立たない」と歎く。すると、たにしが初めて口を開き、自分が父親の仕事を手伝うにやろうと言う。父親の嘆きをきっかけに、たにしが動き出す。20年という具体的な年月が語られていなくても、大きくならないということを語る類話がある一方、すぐに大きくなる、次の日から仕事を手伝うなどの成長の早さについて語る類話もみられ、特別な存在ゆえの普通でない成長が描かれる。

ここでは、遅すぎる自立、普通でない成長の長さについて考えてみたい。客観的に考えると、20年間成長せず子どものままでいるということは、普通でないと感じるだろう。そのため、いつになったら大きくなるのかと苛立っても不思議はない。そして、神棚の上にいるたにしを外に引っ張り出して、大きくなってはいないか、手や足が生えていないかと殻の中を探るなど、外から何らかの働きかけを試みたくなるだろう。しかし、父親は「役に立たない」と歎きつつも、そのような働きかけはせず、たにしのままの子どもをそのまま受け入れている。それは、そのような状態をそのままに尊重する態度である。大人になるのを辛抱強く待ち続けるというのではなく、子ども自身の内側からの成長をそのまま受け入れる姿勢とも捉えることができ

る。子どもの内側では外側から見えない成長が行なわれている。この20年というのは、河合(1977)の述べるカイロスとしての時であるかもしれない。客観的な時間としてのクロノスでなく、心の中で成就される時としてのカイロスである。そう考えると、昔話に語られるように早すぎる成長や遅すぎる成長があっても頷ける。この父親はそのような時をわかっていたのかもしれない。父親が歎いた時が、まさに動き出す時だったのである。

父の代わりに行う仕事とは、年貢米を馬で運ぶことである。類話でも、年貢を運ぶ、薪を売りに行くなど、馬を操っての仕事である。「馬を馭するのが上手で通い馬子になる」と馬の操り方の巧みさが語られる話もある。また、「物言うたにしだと評判になり暮らしがよくなる」とその活躍振りが語られる話もある。たにしという小さな生物が、自分よりもはるかに大きく、荒々しい力を象徴するともいえる馬を自在に動かす。いわば鬼や竜退治に匹敵する偉業ともいえる。英雄としての偉業とは、旅に出て悪者をやっつけるばかりではない、親の仕事を手伝うという日常の坦々とした生活の中にもそのような偉業が存在するのである。偉業としての行為には様々なものがあるが、結婚に至るまでの道筋として、このような行為は必要なのであろう。

父親は誕生の時同様にたいそう驚いたが、たにしの言うとおりにした。「そむいたら罰が当たるかもしれない」という気持ちではあるが、状況をそのままに受け入れる態度がここでも見られる。そして、息子がうまく馬を操る様子を見て、水神様に感謝し、無事着けるようにと祈る。祈る行為が続く。

## Ⅶ、結婚

グリムでは、森に迷った王に、「城に帰って最初に出会うものを自分に与えるなら道を教える」と主人公は言う。このエピソードは、約束として受け取ることができるが、主人公の方は、最初に出会うものが娘であることをどこかでわかっている、娘を手に入れるための策略とも受け取れる。主人公側の欲求、ひいては救済への願望がそこに隠されている。

さて、この話では、主人公側からの欲求や要求は示されず、長者である父親が、娘を嫁にやると提案する。父が「家の宝」にしたいと考えたからである。また、「た

にしを見込んで」嫁にやる類話もある。しかし、他の類話では、ほとんどが、主人公の嫁がほしいという強い欲求から始まる。その意味で、この話のエピソードは極めて珍しく、「たにし息子」のタイプの中では独特の位置を占める。そこにはあえて主流のエピソードを入れないで物語を進めていく意図があるかのようなのである。その意図を探るために、まず、類話のエピソードを検討していきたい。

最も多いエピソードをもつ類話をあげる。「たにしは長者の下の娘がほしいと言ってきかない。嫁をもらってくると米一握りもって長者の家に行く。夜になると、大事なものだから持ってきた米を守ってくれるように長者に頼む。長者はもしなくなったら好きなものを何でもやると約束する。たにしは夜中に起きて下の娘の唇にその米をつけておく。朝になり、自分の米がないと大声で泣いた。そして娘の口に米が一杯ついていて、起きてきた長者に、米を食われたので約束どおり好きなものをもらっていくと、娘を嫁にして連れて帰る。」嫁を手に入れる時の見事なすばやさはグリムの「忠臣ヨハネス」のそれを彷彿とさせる(ただし、そのような仕掛けをするのは主人公ではなく家来のヨハネスである)。父親と主人公の約束という点では、グリムの異類聳と変わらない。嫁を手に入れる方法として「たにしが夜中に寝ている娘の唇にはったいの粉などをつけておき、朝になって、盗まれたと大騒ぎをする」結果として、その娘を嫁にするというエピソードである。また、人の物を盗んだ、行儀が悪いと父親が怒って娘を追い出す類話もある。娘が身に覚えのない罪を着せられて追い出されたところを嫁にする。柳田(1962)によると結婚の際の風習が変化したものであるという。これらの話では、父親をうまくだまして、強引に娘を手に入れる。

河合(1982)は、このような女性獲得の方法をトリックスター的だと述べる。そして、日本の昔話で男性が主人公の場合、このようなトリックを使って結婚する話が多く、典型的な英雄像が見出しにくいとし、むしろ、このようなトリックスター的な要素を持つ主人公が日本においては英雄として受け入れられているという。河合の述べるようにトリックスター的な要素を持つ主人公が英雄として受け入れやすいとすれば、このエピソードがあることによって、日本人にとっての英雄像が作られ、物語としても受け入れやすい筋となる。

それゆえこのエピソードをもつ類話が多いと考えることができる。また、「だんなのすねに吸い付いて離れない」「長者の娘の頬にぴったり取りついて離れない」「娘をくれないと家を壊す」「湯や灰を振りまいて娘をもらおう」など、トリックスター的な乱暴者、悪戯者の類話も見られる。しかし、類話に見られるように、トリックスターの要素が強い場合、主人公の冒険譚へと移っていく。つまり、トリックスターの要素がある場合、面白みやおかしさの方に興味が行ってしまい、本来の物語の筋から離れてしまう危険性がでてくる。ここでは語るべき別の目的をもつゆえにそのような要素を排除したのではないかと思われる。

長者の父親が娘を嫁にやるとたにしに約束する。そこで、父親が娘に尋ねると、姉嬢は怒って断わったが、やさしい妹嬢は、せっかく約束したことだから私が嫁に行くと言う。先に挙げた類話では、男性主人公が、嫁をほしいと主張し、嫁にしたい娘の口に米などをつけて嫁を選ぶ。男性主人公が引き続き表の物語を進めていき、その裏で女性は嫌疑をかけられ、何もわからないまま否応無しにたにしの嫁にされてしまう。男性側からの物語が描かれ、女性の思いや感情は無視される。それに対して、この物語では嫁に行く女性側の主体的選択が語られる。ここから、娘が登場し、表の物語を進めていく。

「父親が約束したことだから」と娘がこの結婚を承諾するのは、この話もグリムも共通している。「美女と野獣」型の物語は父娘の関係の中で物語が展開する。父と娘の結びつきが強く、父の価値観に従う娘という問題も考えられる。結婚を承諾する理由に約束という規範を守ることを挙げている点も父性との関連で理解できる。父性は女性をより高い精神性へ引き上げる力をもつ。この場合、筆者が以前「猿掣入」で論じたような父親との関係での自由と娘自身の主体性や意識性の高さがあると考え（千野、2011）。娘は父親に嫁に行くことを頼まれる。そこで娘は自由に選択をすることができる。姉嬢のように怒って断ることもできるし、この娘のように受け入れることもできる。必ずしも父の要求に従わなくてもよいのである。このやり取りからそのような父娘関係が推察される。類話にあるように一方的に父に追い出される関係ではない。

このような関係性の中で、娘は結婚を承諾する。自分自身で選んだ選択なのである。そこに娘の主体的選

択という意志がうかがわれるのは、「猿掣入」の娘と同じである。しかし、「猿掣入」の娘が異類の夫との関係を切るのに対して、この娘は、グリム同様異類の夫と関係をつなぐことを決断する。この結婚を承諾する娘について、河合（1982）は「娘は他の誰とも違って、田螺の本性を看破していた」とし、「女性の知に基づく積極的な態度」と評価する。また、カースト（Kast, 1986）は、メルヘンにおける結婚を承諾する末娘について、目先の利益を欲しがるのでなくもっと先の連関を感じ取る力があるため、物事を会おうままに受けとると分析する。この娘は関係をつなぐことの意味、縁を感じ取っていたのではないかと筆者は考える。そこに河合の言う本質を見抜く力、あるいはカーストの言う先の連関を感じ取る力、筆者の言葉で言えば見えないものを見通す直感のようなものを持っていたことは確かである。娘は縁の大切さを充分理解して、結婚を承諾したと思われる。そこにあるのは、与えられた運命に泣いて耐える姿ではなく、その運命を主体的に選択して関わる姿である。そのような姿勢がこの娘に感じられ、それはこの物語の初めに語られた夫婦の在り方に通じる。たにしを無理に人間に変えようとせず、たにしをたにしそのままに受け入れる態度である。この類話では、結婚のエピソードに娘の結婚の承諾のみを述べているものも多い。娘が結婚を承諾することの意味深さを端的に表現したものと考えられる。

以上、このモチーフで語りたかったことは、たにしの男性主人公がトリックスター性を発揮して嫁を獲得することだけでなく、娘が結婚を承諾することだったのではないだろうか。すなわち、娘側から物語を語ることである。

## Ⅷ、人としての姿を現わすこと

結婚後、グリムの話ではそのまま呪いを解く話に進むが、この話では嫁いだ後の娘の様子が語られる。娘は両親によく仕えよく働くので、暮らし向きもよくなったと両親はいっそう水神様を信仰するようになる。嫁が来た後も、両親の態度は変わらない。すべて水神様のおかげだと信心する態度を持ち続ける。

さて、娘はたにしの夫と祭り見物に行き薬師様に1人で詣った後、たにしの夫を見失う。娘は自分の着物が泥で汚れるのも気にかけず、夫を探し続ける。ほと

ほと精根尽きて、田の深みに身を投げようとしたその瞬間、人間の夫が現れる。夫がたにしの姿から人間の姿に変身し、妻の前に現れた瞬間である。ここに至るまでの描写は昔話らしくないほどに、娘が必死に夫を探す様子が細やかに語られる。呪いがかけられている主人公の救済に主眼を置くグリムの話と異なり、たにしが人間として現れるまでの娘の有り様を語ることに力点が置かれている。ここまできると、娘が主人公として物語の前面に登場していることは明らかである。グリムの「歌ってはねる、ヒバリ」や前述した「子牛の王様」では娘がいなくなった夫を探してどこまでも歩き続ける話が続く。それに匹敵する描写が、たにしの夫を探す娘の様子として語られる。娘が無我夢中で夫を探している語りから夫への思いが伝わってくる。娘がたにしという異類の夫を受け入れ、その夫を大切にしてきたことによって起きた出来事が「たにしが人間になる」である。

夫は「娘が薬師様に参詣してくれたので、人間になることができた」と娘に言う。類話によると娘が祈願したのは「夫を当たり前の人間にしてくれ」である。別の類話では、祭りに出かけた時に、カラスが田の中に夫のたにしを落とす。娘が必死に探していたところに人間の姿の夫が現れる。「今まで仮にたにしの姿でいたが、よくつとめてくれたそなたの貞節で、はじめて人の性に立ち返った。カラスは実は水神様のお使いだ」と語る。ここでの娘の祈りは、物語の初めの夫婦の祈りと同じである。そして、その祈りが通じたのは、娘の夫への変わらぬ姿勢である。グリムと同様、関係をつなぎ続けるという娘の姿勢が、夫を人間の姿にする。

この話でたにしが人になるという出来事は、信仰とそれを支える態度による。ここで人になるということは、たにしであった異類が人間に変身したというより、類話が語るように、たにしとしての仮の姿が本来の性である人間の姿に戻ったと理解できる。水神の申し子としてのたにしが本来の姿を現わす。それは魔法や呪いが解かれるのに近い。それゆえ、変身よりも、本来の姿（本性）を外に表して娘の前に現れた（顕現という意味での顕れる）という意味合いが強いと筆者は考える。このエピソードを通して語ろうとする意図がここからもうかがえる。

ほとんどの異類が人間の姿に変身する。いくつか

の類話をあげながら、そこで語られたエピソードの意味を考えたい。

多くの類話に打ち出の小槌が登場する。この小槌を使って人間に変身する。小槌の入手方法は様々である。たにしが田や海から打ち出の小槌を取って来る、娘が家の宝の小槌を持って嫁に行くなどもあるが、多くは鬼退治に行くなどして鬼や天狗から手に入れる。ここで打ち出の小槌が登場するのは唐突に思われるが、柳田（1962）はこの物語を「桃太郎」との関連で論じている。この場合、打ち出の小槌の方に関心が行き、笑い話的な落ちが着く類話もある。このエピソードは、前のエピソードに続いてトリックスターの要素を持つ男性主人公の英雄冒険譚あるいは笑い話的要素が強い話となる。

同様に多い類話としてあげることができるのが、何らかの理由や方法で異類の殻（身体）を潰す（打つ、砕く、叩く）ことによって、たにしが人になる。「たにしが潰せというので横槌で打つとたにしはつぶれ若者になる」「たにしが石で打ち砕いて袂に入れてくれという」など、たにしの要求でたにしを潰すと人間に変身する。これは、「ハリネズミのハンス坊や」の呪いを解くときと同じである。たにしの殻は、動物の皮に相当する。殻の象徴的意味も皮同様に理解することもできる。異類からの要求によって初めて皮を脱ぎ捨て人間になることができる。しかし、娘側の一方的な行為として皮を捨てた場合、グリムの場合、夫は娘の元を去り、娘が夫を探す旅が続く。

この昔話では異なる展開がある。それは娘の一方的な行為で、たにしが人間になる類話がある。「嫁は打ち殺してやろうと強く叩くとりっぱな男になる」「寝ているたにし息子をさい槌で打つと音がして立派な髯になる」「嫁がたにし太郎を下駄で踏みつぶすと、きれいな若者になる」など、娘がたにしを潰すことによって、人の姿になる。グリムになくてここに見られるのは、夫への憎しみという娘の感情である。このような感情が生じるのは、類話の中で語られたような娘の意志を無視した一方的な花嫁獲得のせいである。殺意を持ちつつ関わる様子を述べている類話もある。また、「こんなものと一緒にするのはいやだ」と、娘が自分の感情をストレートに語っている話もある。これらの類話では、娘の感情を行動としてそのままたにしにぶつける。そのことがたにしを人間に変身させる。これ

は、グリムの「蛙の王様」で、王女が腹を立てて蛙を壁に叩き付けたときに王子の姿になったのと同じである。どちらもマイナスの感情であるが、そのような娘の強い感情から生じた行為が異類を変身させる。

また、「途中で娘がたにしを踏みつぶそうとするがそのつど『夫を足かける』ととめる。家に帰り藁打ち石にのって杵で潰させるとりっぱな男となる」「睨んでいる娘にたにしはそれほど憎ければ石場でつぶせという。つぶすと美男になる」など、そのような感情をもつ娘にたにしが対峙し、その上でたにしが要求する類話もある。

たにしを潰すことは、たにしそのものを殺すことにつながる。これについて娘の立場から考えてみたい。これらの類話でたにしを殺そうとしたのは、結婚の時だまされて嫌疑をかけられ有無を言わさず嫁にされた娘である。この話では、表側では娘たちの感情は無視され、裏側に追いやられる。つまり、呪いと同様負のエネルギーとなって話の底に潜み、物語の展開に影響を及ぼすのである。そして、ここにおいて、その娘の思いが憎しみとなり殺すという行為になったと思われる(たにしが娘の思いを理解して対峙した類話からは、たにし側の意図もうかがわれる)。自由性を奪われた極限の中でできた行為とは、相手を殺すことであった。確かに殺すというのは極端であり、最悪の行為である。しかし、生きるか死ぬかの状況の中で出てきた娘の主體的行為であることは確かである。娘は、主體的行為として自分の責任において殺すという悪の部分を担当するのである。主體的行為とはそれを選択した責任を負うということでもある。娘はここで始めて自分の行為に責任を持つようになる。ここでは、たにしを潰す(殺す)行為がたにしを人間にするという逆説的な展開を生む。裏側に追いやられた負のエネルギーが表に解放されることによって、呪いや魔法が解けるようにたにしが人に変身したともいえる。ここでは、女性が暗い側面を引き受けそれと関わることになる。

以上、類話を検討することによって日本の物語においても様々な展開があることがわかった。しかし、たにしが人になるという出来事を語る点はすべての類話に共通している。ここで語ろうとしていることは日本の昔話には極めて珍しい「異類が人になること」である。それをどのように語るかは語り手の意図による。トリックスター的な英雄物語になる場合もあれば、グ

リム同様の展開をたどるもの、女性の負のエネルギーを解放する物語になるものもある。しかし、このような笑い話の要素や負のエネルギーを一切排除して、物語の始まりに語られた神への祈りと信仰を一貫したテーマとして語ることがここで取り上げた物語の意図だと思われる。そのくらい見事に、この物語は、神への信仰と祈りに貫かれている。

#### 区、物語が語る信仰とは

この物語は初めから終わりまで神への祈りと信仰を描いている。これが他の類話には見られない特徴である。信心深い夫婦が子どものいないことを水神様に祈り、その祈りによって授かった子どもを「水神様の申し子」として大切に育て、最後には子どもは立派になって、親類縁者みな繁昌したという信仰によって幸福になる話である。ここで語られた信仰について考えてみたい。

まず、ここで信仰される水神とは、高谷(1984)によると、水の神のことで、一個の神格が存在するわけではなく、それぞれの地、それぞれの社会において、自然に生れ出たもので、その社会に根づいた信仰であり、いわば人々が各自の暮らしの中で、水と関わる中でそれぞれに水の神を生み、信じてきたという。人々がこの神に祈ったことは主に降雨であり、稲作を生業とする社会において、降雨の有無は農民にとって死活問題であり、水への願望は熾烈であったという(高谷、1984)。そのような願いから出てきた雨乞や祭りであるが、最上(1983)によれば、稲作用の水が涸れることなく、あふれることのないよう、稲の無事成長を祈るためのものがあつたのではないかと述べている。

この物語に登場する水神様は、罰が当たるかもしれないと父親が思う程度に力を及ぼす神とされているが、禁忌を破ると嵐を起こすような恐ろしい神(高谷、1984)ではない。長の年月、人が神と関わり続けることによって、祟り荒ぶる水の神が次第に和らぎ、田の実りを約束し感謝される神となり、次第に、稲作や水に関わることでなく人々の生活全体を守護する神となっていったように思われる。また、この話の終わりに出てくる薬師様も仏教の仏であるが、治病、延命、産育の現世利益を願い、庶民が広く信仰したという(五来、1986)。おそらく水神様と同様の心情で信仰され

ていたと思われる。このように生活の中に信仰があり、生活と信仰が分かち難く結びついている。信仰によってつつがなく生活を送ることができ、またつつがない生活を送ることによってさらに信仰が深まる。

ここで信仰される神は、国家などの外の権力から与えられた神ではなく、民衆の内側から生まれた神である。このような神を生み出す信仰の在り方に、河合の述べる宗教性があると思われる。河合（2006）は宗教性を「理由を超えた存在というものがあって、そのはたらきに対して、畏敬の念、畏れの念をもってそれを見る態度」と定義する。村上（1997）は、「自然のなかに、人間を超える超越的存在を認める」信仰であるという。自然の中で生きていくうち、人間にはどうにもならない力を感じ取り、そこに「理由を超えた存在」あるいは「超越的存在」を見出したと思われる。人と自然との関わりの中で見出された神である。そこにある感情は畏敬と畏れの念である。村上（1997）は、そのような人間を超える何かに対する「惧れ」の感覚が、人間の行動に秩序を与え、人間の自然に対する野放図な扱いを制限し、人間の限りない欲望への歯止めとなっていったと主張する。それが宗教の機能だとする。そして、そのことが日々の生活における慎みという生活態度を作り出していると述べる。

筆者は、村上の述べるように、信仰と慎みがなんらかの関連を持っていることはその通りであると考えられる。しかし、この信仰にあるのは畏敬と畏れの感情だけではない。この話に描かれている生活態度は、確かに慎みという言葉がふさわしいが、そのような畏れというマイナスの感情から生じているのではない。むしろ、神を敬うというプラスの感情が中心となっているのではないだろうか。つまり、祟りや罰を畏れての畏怖の感情からではなく、日々の生活を無事に送ることができたという感謝の気持ちからの信仰であると思われる。神を敬い尊重する態度から生じていると考えられる。それが生活全般にわたっている。この信仰にあるのは、畏怖でなく、敬愛の念であり、更に進めれば、親しみの感情である。そのような神と人との交流が、日々の生活を守る神となり、民衆の願いを叶えてくれる存在へと変化していったように思われる。この話では、夫婦は水神様に子どもが欲しいと祈りし、娘は薬師様に夫を人間にしてくれるように祈る。願いを叶えて欲しいという姿勢に、ここでいう慎みという

態度が付随すると考える。慎みの態度の背後には2つの正反対の動機が存在する。罰を畏れての態度と願いをかなえるための態度である。どちらであるかによって、心の在り方が全く異なってくる。何かを畏れての態度はどこか窮屈であり後ろ向きであるが、この物語を読んで受け取るものは、そのような感覚ではなく、心が解きほぐされるような温かい感覚である。

この話で行なわれているのは、信仰することと祈ることである。神を信じて、願い続けることである。そして願いを叶えてくれる神へのかぎりない感謝の気持ちである。父親がつぶやいたような嘆きや罰が当たるかもしれないという感情が多少あっても、それ以上の負の感情はない。日々の生活を守ってくれる神、願いを叶えてくれる神への感謝の気持ちがそのような負の感情に勝っているからである。そして、そのような信仰とともにあるのが、夫婦の姿勢である。たにしの子どもを受け入れて、大切に育てる。すなわち、自分たちに起きた出来事があるがままに受取り、受け入れる態度である。期待したことはなかったと失望したり、怒ったりせず、大切なものとして尊重して受け入れるのである。夫婦の持っているこの姿勢は嫁である娘の姿勢として引き継がれる。娘はたにしとの結婚を受け入れ、たにしの夫を大切に扱う。良いか悪いか、得か損かなどの個人的な価値判断をせずに、神から与えられたものとして受け入れる事から始まるのである。そこからうかがわれることは、他ではなくまさに自分に与えられたことの意味深さと、与えられた日々の生活そのものが実は奇跡のような有り難いことであるという体験的認識である。人間の力の及ばない働きの中に生きているのだという自覚である。その認識は、人間を謙虚にさせるとともに、人が何か大きなものにつながっている、守られているという安心感をも与えると思われる。

## X、終わりに

日本の異類聳譚でありながら、異類が人間になり結婚が継続する昔話について、信仰を1つの手がかりとして論じてきた。ここで見てきたように、信仰と祈りによって、神の申し子が生まれ、神の申し子であるという特別の存在であることが、異類を人間にした。この昔話は信仰による祝福の物語と考えることができ

る。ここで語られる信仰は特定宗教の信仰の証としての苦行や厳しい試練に耐えることではない。それは、日々の生活への感謝と見守る神への親しみである。神とともに生活することの意味や、神は日々の生活の中に存在することを教えてくれる。現代を生きる私たちにとって、神や何かを信じることは難しい。しかし、この昔話は、何かを信じられる気持ちにさせてくれる。信じることの大切さを伝えてくれるのである。

この物語の大きなテーマは信仰であり、そのおかげでたにしが人間の姿になったが、物語の後半に大きな役割を果たすのが嫁となる長者の娘である。娘は、夫婦のそのままを受け入れる姿勢を引き継ぎ、さらにその先に行く。自分からたにしに嫁になろうと申し出る。そこに見られるのは、消極的な犠牲的精神でなく、積極的に受容する精神である。この時たにしを人間に変えようという意図はなく、たにしそのものをありのままに受け入れて大切にすることを姿勢である。祈りの通りたにしは人間の姿となったが、たとえたにしのままでも、娘は変わらずに夫を大切に続けたと思われる。娘の受容は、何かを期待したり見返りを求めてのものではない。受容することの重要性、そしてそこに神の祝福があることを教えてくれる。

### 引用文献

- Bly, M. (1990). *Iron John, New York Random House, Inc.* 野中ともよ訳. (1996). *アイアン・ジョンの魂*, 集英社.
- 五来重編. (1986). *薬師信仰* (民衆宗教史叢書 12), 雄山閣出版.
- 稲田浩二. (1988). *演習版・日本昔話タイプ・インデックス*, 同朋社.
- 稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久編. (1994). [縮刷版] *日本昔話事典*, 弘文堂.
- Kast, V. (1986). *Familien-konflikte im Märchen*, Walter-Verlag AG. 山中康裕監訳. (1989). *おとぎ話にみる家族の深層*, 創元社.
- 河合隼雄. (1977). *昔話の深層*, 福音館書店.
- 河合隼雄. (1982). *昔話と日本人の心*, 岩波書店.
- 河合隼雄. (2006). *日本の精神性と宗教*. 河合隼雄・鎌田東二・山折哲雄・橋本武人. *日本の精神性と宗教*, 創元社, pp.11-54.

- 最上孝敬. (1983). *生業の民俗* (民俗民芸双書 92), 岩崎美術社.
- 村上陽一郎. (1997). *日本の文化的基盤と超越的存在*. 河合隼雄・村上陽一郎編. *内なるものとしての宗教*, 岩波書店, pp.1-17.
- 関敬吾編. (1956). *こぶとり爺さん・かちかち山—日本の昔ばなし (I) 一*, 岩波書店.
- 関敬吾. (1978). *日本昔話大成第3巻 本格昔話二*, 角川書店.
- 千野美和子. (2007). *日本昔話に見る精神性*. 仁愛大学研究紀要第6号, 1-11.
- 千野美和子. (2010). *昔話から心理療法を考える*. 京都光華女子大学人間科学部人間関係学科編. *ひと・文化・発達—関係を見つめなおす人間科学の視点—*, ナカニシヤ出版, pp.179-192.
- 千野美和子. (2011). *日本昔話「猿轡入」にみる女性の意志*. 京都光華女子大学研究紀要第49号, 1-11.
- 高橋健二訳. (1976). *グリム童話全集II*, 小学館.
- 高谷重夫. (1984). *雨の神—信仰と伝説* (民俗民芸双書 94), 岩崎美術社.
- 柳田國男. (1962). *定本柳田國男集第8巻*, 筑摩書房.